

第16回 ちゅうでん教育振興助成（平成28年度）

報告書資料 一般-53

学校名・団体名	豊川市立金屋中学校
HPアドレス	http://www.city.toyokawa.lg.jp/shouchuuichiran/tj-kanaya/
コース	学校支援
活動・研究 テーマ	伝えよう 糸のきらめき 繭のぬくもり
<p>〈活動・研究の意義、目的〉</p> <p>地域の伝統産業であった綿の栽培と蚕の飼育、草木染などの活動を通して、先人の知恵に気づかせる。それらを継承する方々と触れ合うことで、活動の価値を再認識し、畏敬の気持ちを高めさせる。原料から作品までを自分の手で形づくり、製品に仕上げることで、自分の成果を確かめ、自信をもてるようにさせる。</p> <p>特別支援学級の生徒が栽培した綿や飼育した蚕を使って、通常学級の生徒も糸紡ぎに携わることで、相互の協力と理解を深める。</p> <p>本校の研究テーマ「自己肯定感を高め、主体的に学ぶ生徒の育成～共感的な人間関係づくりと自己存在感の視点を生かして～」を、起業活動（アントレプレナー）を通して、実践する。</p>	

《地域的特色を生かして》

豊川市立金屋中学校は、今年度創立40周年を迎えた、市内で最も若い学校である。市の中心部に位置し、市役所・図書館・競技場など公共施設が徒歩圏内にある、いわば町場の学校である。70年ほど前、ここには東洋最大といわれた豊川海軍工廠があり、終戦直前の1945年8月7日には、B29の爆撃によって、学徒動員で徴用されていた同年代の若者たち2500人余が命を落とした。この建設を可能にしたのは、桑畑しかなかったという広大な土地と養蚕に携わる労働力であった。すなわち、生糸を紡いで軍艦を買うという富国強兵策を体現していたのが、金屋中学校区の歴史である。また、遠江から三河にかけては綿の一大産地であり、東海道・姫街道・伊那街道が交わる豊川市は、綿の集散地でもあった。

綿の栽培と蚕の飼育に取り組み、糸を紡ぎ、布にしていけることは、地域の産業を体験することであり、同時に歴史的分野の重要語句の一つでもある工場制手工業（マニファクチュア）を理解することである。特別支援学級である7組・8組では、社会科および総合的な学習の時間を通して、地域の伝統産業であった綿の栽培と蚕の飼育、草木染に取り組んできた。特別支援学級で栽培・飼育することで得た綿や生糸を、通常学級の授業で教材として利用することで、通常学級の生徒の歴史認識を高めることができた。

《地域のお年寄りからの学びとアントレプレナー（起業活動）を通して》

1. 綿の栽培から糸紡ぎ

5月に、学校の中庭の一部を耕して、綿を播種した。発芽や生育に温度と湿度を必要とするため、黒いマルチシートを敷いて育てることにした。当初は発芽が揃わなかったり、生育状況がよくなかったりしたが、夏休み前にぐんぐんと大きくなり、たくさんの花をつけて綿を実らせた。

10月にはじけた綿を収穫し、スピンドルを用いて糸を紡いで染色した。ふわふわの綿を糸に仕上げていくことは難しく、作業は遅々として進まなかった。ここで、地域の伝統産業である綿の製糸・染色を経て伝

統的な繭をもつ綿布づくりに携わっている三河木綿工房手織場会に教えを乞い、技能の向上を図った。教えていただいたことを生かして、「綿

打ち」の作業を入れることで、スピンドル（こま）を使つての糸紡ぎの技術が格段に向上した。

2. 蚕の飼育から糸紡ぎ、繭の飾りづくり

5月から蚕の飼育を始めた。白色だけでなく、黄色・レモン色・草色等の繭になる蚕卵を入手し、それぞれ担当の生徒を決めて飼育にあたった。十数年前まで校区に存在した桑畑は宅地化により消えたものの学校に隣接する佐奈川の堤防に何本かの桑の木があり、餌を入手することができた。

7月には繭になったが、生徒たちの強い希望で、蛾になるまで見届けることになった。蛾には口がなく、食物はもちろん水分も摂取できない。蚕の命のはかなさを強く感じる一方で、蚕が生糸をとるために改良された家畜であることを確かめ、生徒たちにある種の覚悟ができたように思われる。蛾が産んだ卵が孵化し、夏休みを通して二度目の蚕の飼育をした。北設楽郡東栄町で繭の花づくりをされているお年寄りの所へは、保護者の運転する車で乗り合わせて出かけ、見学させていただいた。1つの繭を極薄く剥いでたくさんの花びらを作る技術は、特別支援学級の生徒には難しいものであったが、繭の形と温かさを生かして飾りを作るヒントをいただいた。

繭を煮て紡いだ糸を、藍や茜など昨年度栽培して採り貯めてきた植物

や家庭で食べた栗の鬼皮などを使って、草木染を行った。様々な色の糸ができたところで、ボール紙に切れ込みを入れて作った簡単な織り機でコースターや本のしおりを制作した。花壇のマリーゴールドで染めた縦糸に、自分たちが紡いだ糸で染色した糸を横糸として平織で作品づくりに励んだ。最初はなかなかうまくいかなかったが、互いに教え合ったり手伝ったりして、黙々と集中して取り組めるようになった。福島県の「里山のクラフト便り」のホームページを見て、ここで紹介されている干支の鶏を繭で作ろうと考えたが、パーツが多くて「ペンギン」に変更した。松ぼっくりで作ったリースに、色とりどりの糸や繭飾りを付けて、豊川市特別支援学級の作品展であるわかくさの子ら展のバザーで販売した。



【写真1】三河木綿工房で糸紡ぎを学ぶ生徒



【写真2】学んだことを生かし綿打ちする生徒



【写真3】草木染による綿糸、生糸

栽培と飼育を通して原料を得、草木染で価値を高め、製品に仕上げ、商品とすることは、長い期間と粘り強さや気の長さを必要とする活動であった。これをやり遂げた生徒たちは、自分の取り組みに自信をもつことができた。



【写真4】原料から製品に仕上げる

《共感的な人間関係づくりと自己存在感の視点を生かして》

豊川市教育委員会より研究委嘱を受けて2年目になる本校は、研究テーマ「自己肯定感を高め、主体的に学ぶ生徒の育成～共感的な人間関係づくりと自己存在感の視点を生かして～」を基に教育研究を推進している。この研究の柱の一つが「アントレプレナー」である。アントレプレナーは、「起業」する活動を通して、生徒たちが自分自身を知り、自分の人生を切り拓くことを目的としている。総合的な学習の時間の「自ら学び自ら考え」という理念を生かしながら、自分のよさを感じ、友達のよさを味わいながら、自分の生き方を考える活動である。これを特別支援学級の生徒を対象に考えたとき、大切にしたいのは継続と自立を促すことの2点である。難しいことについてはどうしても逃げたり人に頼ったりしてしまいがちな生徒にとって、本研究の一連の学びと体験は、大きな成果があった。まず、栽培と飼育という命を預かる経験は、継続と自立を養うことにつながった。特別支援学級の生徒のなかには、虫が苦手だったり、臭いに弱かったりする子もいる。そういう仲間の分まで、できる子ががんばろうとする動きが見られるようになった。次に、地域の伝統産業を伝承する方から直接教えていただいたり、制作を見せていただいたりする機会が生徒の態度を鍛えることにつながった。難しい作業を黙々とこなすお年寄りの姿を見たり、仕事の価値を語っていただいたりしたことを通して、作業学習に簡単に音を上げなくなった。さらに、上級生は、いろいろな活動に責任や見通しをもって取り組むことができるようになり、そんな上級生の様子を見た下級生もまた、自分を振り返り、自分を高めようと努力するようになった。



【写真5】わかくさの子ら展のバザー

卒業式の前日には、1年生の生徒が次のような手紙を3年生に宛てて書いた。

「1年間お世話になりました。社会のときに、虫が苦手だけどちゃんとお世話ができて、すてきでした。はたおりを一緒にやりましたね。すごくうまくできていて、すごいなあと思いました。わたしも先ばいみたいに、上手になりたいです。先ばい方もはたおりを家でもやってみてください。まゆの中から、さなぎを出すのもやったよね。正直、まゆの中からさなぎをむくのは無理でしたけど、先ばいの姿を見てできるようになりました。本当にありがとうございました。スピンドルを一生懸命やる姿が先ばいらしくてすごかったよ。わたしも先ばいとして、後はいに、社会の勉強を教えてください。」

これらの活動を通して、上級生はあるべき姿に近づくよう努力し、下級生はそういう姿に近づけるよう自分を鍛えることができたといえよう。

《まとめ》

江戸時代から戦後まで、綿の栽培と蚕の飼育が盛んだった地域的特色を生かして、中学校社会科歴史的分野のキーワードの一つである工場制手工業（マニュファクチュア）を特別支援学級の生徒が理解できるように、体験活動を取り入れた学習を構成した。命を預かる活動を通して責任感を身につけると同時に、虫やおいを克服しようとしたり、それらを苦手を感じる仲間の分まで自分がかんがって取り組んだりしようとする強い気持ちを培うことができた。さらに、伝統産業を継承しているお年寄りから技術を教えていただく機会を通して、手仕事の大切さやそれらを伝える地域の人々に畏敬の念をもって接することができるようになった。栽培する、飼育する、糸を紡ぐ、草木染をする、平織をする、繭玉の飾りを作る、バザーで商品として売る、という諸活動に長い期間携わることで、粘り強さや見通しをもった取り組みができるようになった。努力した自分に自信をもち、ともに励んだ仲間のよさを認めることができるようになった。上級生はより頼られる存在に成長し、下級生はあるべき先輩の理想の姿を見つけることができた。これらの学びと体験は、今後の学校生活に、あるいは卒業後の新しい世界での自信につながっていくに違いない。

このような機会を支えてくださった貴財団に対して、厚く御礼申し上げたい。